

なつみローリングストーン

kiriyami

「・・・お前さあ」

ゆうきはPCの画面に向かったまま、唐突に話し始める。彼は今リズムトラックの組み立てに悪戦苦闘中である。

「ん？何？」

なつみはピンクのショートパンツにピンクのシャツ、タオル地でやわらかい。ソファに長い足をのばして好きな単行本を読んでいる。

「俺たち、付き合い長いよなあ」

「ん」

「それなのに何もない。不自然だと思わないか？」

「またそれか」

(まったく、男は・・・) なつみはため息を1つ。ゆうきとなつみは幼馴染である。学校も高校まで一緒に、住まいも近所だった。中学校のころにほのかに芽生えた感情は、高校のころには熟成しつつあった。

「私はそういうの、興味ないんだよね」

ページをめくりながら、なつみはつぶやく。

「男の気持ちを・・・っていうか、お前は俺の気持ちをわかってないなあ」

あいかわらずPCの画面意図かいながら、手はカタカタとキーを打ち続ける。

「私だって・・・(はっ)」

なつみは言いかけてやめる。

近所付き合いから二人はいつも一緒だった。趣味はサッカー。小学校の時は、なぜかクラスが別々だったが、中学に入ると、一年の時からクラスが一緒になった。二人が急接近したのは、このときからだ。

ゆうきは中学に入ると背がぐんぐん伸び、一年の3学期には慎重が160センチを超えていた。対して、なつみは148センチ。クラスでも小柄なほうで、朝礼の時には前の方。体の成長が急激なときは、体だけでなく、いろんなところが成長するわけで、ゆうきも急激な身体変化を経験する。まず、ひげが伸びる。声が太くなる、精神も不安定になる。そんなゆうきが、なつみは頼もしいと感じるのだが、対するゆうきはまったく新しい感情が芽生えてくる。今まで普通に一緒にいるなつみを、ただの友達として接していたのに・・・。

自分よりも、頭ひとつ違う背丈、細くてつややかな眺めの髪、細い長い手足、白くて柔らかな肌。

「これって・・・」

ゆうきは今までに感じたことのない、妙な気持ちを自覚する。それでも、中学の3年間は今まで通り、友達として、サッカーをしたり、一緒に登下校したりしていたが。

高校に入ると、その気持ちは決定的になった。

(こういう感情って、普通は女性に対して持つものだよな)

表面上は冷静でいても、中身は抑えきれないほど高揚している。自然、話題もぎこちなくなってくる。

「お前さあ、風呂入るとき、洗うのはどこから」

「ん、頭からだけど」

「寝るときは何着てねる？」

「ハア？パジャマに決まってるだろ、あ、たまにはTシャツのときもあるけど、めんどい時は」
・・・という調子だ。

ある日、ゆうきは決意する。放課後、部活動が終わって、二人いつもの下校途中。

「あのさ・・・」

「ん？何？」

頭ひとつ低い幼なじみを見つめる。細いつややかな髪、少し茶色がかっていて長めの髪は、風に揺れている。その顔がこちらを向いて。小さい顔、髪の色と同じ茶色がかった瞳、形のよい鼻、うすいくちびる。そのくちびるがかすかに開いて問う。

「ん？何？」

なつみの口癖。でも、ゆうきが好きな、なつみの癖。うまくいえるだろうか。夕日に照らされた、なつみの顔。何も考えていないようななつみの瞳は、それでも答えをまっているように、ゆうきにはおもえた。

「お前さあ・・・」

でも、出てきた言葉は、ぜんぜん違う言葉で、

「最近、変わったと思わない？」

「何が？どこが？」

「その・・・なんていうのかな。体・・・っていうか」

「んー、そうかな。確かに身長も少し伸びたし、力もついてきたかな・・・うん」

「ああ、そうだよな。シュートも決まる率、高くなってきたし、俺たち、押しも押されぬ2トップって感じ？」（いや、違う！そうじゃなくて・・・）

「で・・・？」夏見の言葉に、はっとしてわれに帰ると、二人は公園の入り口にいた。

「ちょっと、こっち」ゆうきは自身の高ぶった気持ちを静めるために、ベンチに誘った。

「今日のゆうき、変だよ？」

「そうかな・・・いつものとおりだとおもうけど」

「そう？それにしちゃ、ぎこちないな。ひょっとして、告白？」

（ぎく！こいつ、俺の気持ち読んでる！？）

隣に座ったなつみの体温がやけに高く感じる。実際、ほとんど二人は接触しているのだが。

「・・・ゆうきの気持ちはなんとなく察してた」

唐突になつみが話し始める。

「俺たち、小さいころからずっと一緒だったじゃない？」

少しうつむきながら、

「きっと、俺のこと好きなんだろうなって、あ、そう思ったの最近だよ」

「うん」

「ゆうきは背がどんどん大きくなるし、男っぽくなって行って、たのもしいなって思った」

「そうなんだ」

「このごろ、なんかいつもと違うなって、思って見てた。そしたら・・・ね」

なつみはくすりと笑って、ゆうきを見た。ああ、もう決定的だ！今こそ告白しなきゃ！

「俺、だからおまえが」

そういい始めたとき、なつみはさえぎるように

「俺、決めたことがあるんだ」

「え？」

「なりたいものがあるの、っていうか、やりたいこと。自分がこういう容姿だし、周りの反応とか。自分の性にこだわらないことにした」

「は？」

「つまりね」

クスリとわらいながらなつみは

「俺、自分の性を捨てるの！で、自分のやりたいことを、やることにした。このまま大学にいて、普通に会社には行って、サラリーマンしても、きっとそれだけでおわっちゃうと思う。だから、自分がやりたいことだけ、やるの。そのために今からいろいろとはじめてるんだ」

「生活とか、金とか、どうすんの？」（いや、そういうはなしじゃないだろ、いまは）

ゆうきは自分にいいながら、なつみを見つめる。

「だから、決めたの」

「それは、NHになるってこと？」

「んー、なんていうのかな。そういうんじゃなくって・・・。もう性別とか関係なくって。つまり、自分のなりたいものになるってこと。やりたいことやる」

告白するつもりが、逆に告白されてる。この次に来る言葉は、まさか？

「だから・・・今は友達でいて、俺を見ていてほしいんだ。で、俺がくじけそうになったら、支えてほしい」

真剣なまなざしで、なつみはゆうきを見た。

結局、逆告白されて、なんとも煮え切らない気持ちで、いつもの道を帰るゆうきは、そのまま高校生活を終わる。

「・・・でさ」

相変わらず、キーをたたきながらゆうきはなつみに、問いかけた。

「そういうのが、たまにはあってもいいと思うんだが」

「そういうのって？」

「そういうのだよ！男女の間柄だったら、普通にあるようなこと」

「だから私は、興味ない」

(ふう・・・)

ずっとこの調子だ。あのとき、告白してからもずっと。それでも二人が仲たがいをしないのは、お互いを尊敬しているからだ。

告白を受けた(した?)後のなつみは、怒涛のごとく行動を起こす。PCで自分のHPを作成し、当時まだ珍しかった、ブログを公開して、驚異的なヒット数を記録。それがマスコミに注目され、出版物まで発行したり、TV, ラジオに出演したりした。それと並行して、自分の体を改造すべく、着々と準備を進めていった。

ごく普通の家庭だった。普通のサラリーマンの家庭に育ったなつみは、ごくふつうの男の子だった。日常が変わってしまったのは、父親の転職がきっかけだった、それまで平凡なサラリーマンだったなつみの父親は、外資系大手企業に就職する。あれよという間に出世し、収入も桁がちがいに増えた。生活も一変し、アパートすまいから、郊外の一戸建てになった。かなりの土地と豪華な住まい。当然生活も派手になり、やがてお決まりの浮気。あとは絵に描いたような家庭崩壊。男ってこういうものだ、となつみは思った。男の浮気は本能的なものだと思った。

力を誇示し、筋力を自慢する。自分はこうはなりたくないと思った。男でなくてもいいと思った。それでも悲観的にならなかったのは、自分の性格、元来ののんびりやさんで、物事を確実にこなしていくなつみは、学校の成績もよかった。何度も表彰された。大学へは、奨学金を出してまで進学することが約束されていた、それなのに、彼は誘いをかけて違う世界へ飛び込んだ。自分の収入が確保されると、ゆうきは次のステップへ進んだ。

ネットで医者を探した。正規の手続きを踏むと、時間が異常にかかるのと、制約が多すぎるからだ。

手術は意外とあっけなかった。普段の生活に戻ると、なつみの奇行がますます世間の注目を集め、もはや自分ではコントロールできなかった。

だからなつみは、自分のHPを閉じた

「わたくし、日向なつみは、死にました」

たった一言のコメントを残して。

ふたたび世の中に出てきたのは、それからしばらくたってから。HPを閉じたなつみは、ひたすら創作活動に専念した。時々ストリートにたったり、出版社に投稿したりしながら、自分の知的欲求を満足させていた。

そんな折、幼馴染に再会した。

「・・・なつみ？」

突然声をかけられ、振り向くとそこには懐かしい顔があった。

「あっ、す、すみません。なんか幼馴染に似てたもんで」

なつみはおかしかった。

（気がつかないんだ。そうだよ、あれからずいぶんたって、なんたって、見た目がかわっちゃってるからなあ）

でも目の前の男は相変わらず背が高く、頼もしくて、自分にとってなじみの声。あの包み込むような、遠慮がちな声。

「ふふ・・・」

「？」

「久しぶりだね」

見た目とあまりに違う声に、幼馴染は驚きを隠せない。

「やっぱり、なつみなのかよ！」

「なんでわかった？見た目がぜんぜん違うのに」

「や・・・なんていうか、後姿が似てたから・・・」

そうして二人はここにいる。再び同じ舞台にたっている。文字通り二人は、なつみが放浪（？）時代につくりためた膨大なスコアを元に、もう一人、“ゆうじ”というメンバーとグループを組み活動を始めた。はじめのうちは、自分たちのHPで、ネット配信のみの公開だったが、そのうちレコード会社からオファーをもらい、CD製作にはいる。基本的にライブはしないことを信念としていたが、いづれ自分たちの欲求と「ひきこもり」では健康によくないという理由で、ライブ活動も始めた。

で、今この部屋で、二人は作曲中というわけである。

「私はそういうの、興味ない」

なつみは捨て台詞とともに、読んでいた単行本を足元に投げ捨て、シャワーを浴びに行った。

（あんな格好で、同じ部屋にいて、我慢しろっていうのかよ。男なんだぞ、おれは！）

今日何度目かのため息をつきながら、ゆうきはキーを打つ速度を速めた。

シャワーの熱さが心地よい。なつみは熱めに設定したシャワーを浴びながら、ふと自分がこんな体になる前、手術当日のことを思い出していた・・・

夏の真っ只中だった。都会のど真ん中にある病院への道は、日差しをさえぎるものがなく、じりじりとアスファルトが焼けている。それでも、それほど暑さを感じなかったのは、少し緊張していたからか。

病院に着いて受付を済ますと、20分くらいして看護師に呼ばれ、手術室に入った。思ったより清潔な部屋・・・。診察台に横になり、麻酔をかけられる。

「おわりましたよ」医者で目を覚ますと、すっかり手術は終了していた。壁にかけてある時計をみると、きっかり3時だった（2時間も経ったんだ）わずかな痛みと、麻酔による陶酔感でぼんやりしていると、医者から簡単な説明があった。

「しばらくはここで療養してもらいます」

退屈だったが、妙な達成感があった。これで自分も変われるかもしれないとも思った。

子供のころは特に目標とかがなくて、このまま大きくなって家庭をもって、年老いていくのかな、なんておもっていた。

今だって、自分の将来のことなど、予想もつかないし、考えたこともない。

でも、自分のやりたいことをやっていくんだ、それでいいんだ、と思った

退院の日、医者に「よくがんばりましたね、これからもがんばってね」といわれたとき、ちょっとホロとなった。

（あれ？私は感情的になるような人じゃないのにな）

「あなたのHPはみてましたよ」

ああ、この人は私のことをしてたんだな。こんな自分が全然面識のない人、自分が知らない場所でも、自分のことをしてくれてる人がいるんだな。漠然と、そんなことを思った。また何かやりたくなった。

「あつ！」

温度を上げすぎたシャワーが顔にかかり、なつみは我にかえった。

「さて、はじめるか！」

「・・・そこは開放弦でやるから、ハイコードで」

なつみはスコアを前に、メンバーに指示を出す。郊外のスタジオで、現在新曲のレコーディング中。

「でも、音がうるさくならないか？」

「だいじょぶ。その分、ドラムの音数少なくしてもらおうから」

滞りなく作業を進めていくなつみは、もはや敏腕プロデューサーといった感じ。

3時間ほどで1曲仕上げた。

この日は3曲録音して終了。CDにいれるのはあと2曲

「今度はストリングスもいれたいと思うんだ」

「うん」

「それも生で」

「あそ」

メンバーの間に驚きや葛藤がないのは、バンドマスターであるなつみの力量とバンド全体の経験値によるところが大きい。

なつみはギター、ベース、ドラム、キーボード、そしてバイオリンすらあやつるマルチミュージシャンである

「私は、ミューズの生まれ変わりなんだ！」

時々なつみは冗談混じりにいう。でも、冗談には聞こえない。あらゆる楽器をこなし、コンポーザーとしての実力もあり、加えてこの容姿。茶色がかった肩まで届く髪、髪と同じ色の茶色い瞳、スレンダーなボディに健康的な長い手足。

「ここだけ失敗しちゃったかな」

笑いながら、なつみが指差したのは自分の胸。いわゆる、貧乳である。

「ま、それでも、需要はあるからね」

わかったような、わからないようなことをいって、煙に巻く。ほかの二人は無反応である。いつものこと。

なつみがどんな人間なのかわかっているから、3人の間にはそれぞれ微妙な距離感がある。でも、それでいいと思う。みんなそれぞれ、おいてきたものがあるから。

ぽっかりと開いた、その部分をうめてやるんだ……。

次の日もスタジオ入りである。3人はきわめてラフな格好で、建物に入っていく。なつみだけはバイオリンのケースを抱えて、足早に会談を駆け上った。

「今日は気合入れていくからね！あ、今日も、か」

今日はバイオリンのパート録りである。必然、なつみの持ち時間が長くなる。

弓に松脂をたっぷり含ませ、なつみは準備する。

「このフォルムがセクシーなんだよね」

「お前に似てか！？」

ゆうきはからかった。「まあ、私には負けるけど、おっと、こんなこといったら、ルチア様が怒る」

ルチアとは、なつみがバイオリンにつけた愛称。プロのミュージシャンはよく自分の愛器に名前をつけたりする。ルシールとか、ブラッキーとか。

エンジニアの合図でなつみは一人、ブースに入る。

「ここからは孤独な戦いだ！」

冗談めいたことをいってなつみは自分に気合をいれる。ほかの二人は無言で手を振る。（いってらっしゃい）みたいな感じでなつみを送ると、二人はそのままブースの外で立ったままなつみを見つめる。向かって右がゆうき、左がけんじだ。

エンジニアのキューでなつみは弓を滑らせる。リズムトラックに合わせてゆっくりと、だが、大胆に弓を滑らせる。そして、中間部は早いパッセージだ。弓を細かく動かす。左手の動きは。4本の弦を上から下まで、目にも止まらない速さで移動する。ゆうきもけんじも、腕を組んで微動だにしない。

やがて、エンディング。低音から高音まで、一気に駆け抜けて曲はおわった。

「まるでクラシックのソリストだな」かんじがぼつりと言った。

なつみが満足げにブースから出てきた。少しの興奮と緊張で、額に汗をかいている。

「おつかれ」

ゆうきがタオルを、けんじがカップにいれたミネラルウォーターを持ってきた。

「さんきゅ」

こうしたさりげなさも、3人の連帯感をあらわしている。

結局、エンジニアとプロデューサーの指示で、何箇所か手直しはしたものの、ほぼ予定通りに終了。次は、けんじの番だ。

なつみはバイオリンを丁寧に拭きながら

「終わったら、一杯いくよ！」

とけんじに言った。

「OK!まかせろ！」

今はテクノロジーが進歩したおかげで、PCによる編集が可能。一曲通してのラフな録音をして、後は個々のソロをかぶせるやり方だ。コーラスすら、人工的に作ることが可能になった。

「でも今日は生で行こう」

なつみは提案した。バイオリンをいれることで荘厳な感じにしたいと思ったのだ。アップテンポでリズムを強調した曲は、コーラスも「ボーカロイド」にした方がいい。

ブースの中ではけんじがギターと格闘中。感情をこめた曲なので、まさに動きは格闘技である。ギターに取り付けてあるアームを駆使して、表情豊かに弾きこなす。けんじはこういう曲が得意だ。ロングトーンとアームを使った、まるでカレイドスコープのような音色は、まさに真骨頂。かれらのCDが好評なのは、けんじの力量に負うところが大きい。

なつみは作曲、アレンジ、技術ともに申し分ないが、表現力に乏しいところがある。ともすれば、堅いイメージになりがちである。けんじはまさになつみのスコアに彩を添える、パステルの様。

やがて録音が終了し、けんじがブースからでてくる。

「おつかれ」

「おつかれさん」ゆうきとなつみがねぎらう。

「どうだった？」

「ん？まあまあかな」

なつみの問いに、けんじはひかえめに答える。けんじの「まあまあ」というのは、かなりのできだった、ということだ。けんじの場合も多少の音の入れ替えで終了。PCを使って、おかしいと思う音だけ入れ替えるのだ。

テクノロジーの進化は恐ろしい。たとえ自分が入れた音でも、気に入られなければそっくりほかのものの録音したものに変えられるし、まったく違うアレンジにしてしまうことも可能だ。なつみは何度もそういう経験をしている。だからこそ、今の自分の立ち居地に納得している。「自分のやりたいことを、やるのだ」と。彼らがマイナーレーベルにこだわるのは、不必要な束縛がないこと、自分たちのペースで作品が発表できること、マネージメントがしっかりしていること等。

売れなくなったら放出されてしまうレコード会社とか、金銭トラブル、ブッキングの不正確さ。そういったものに振り回されるのは、自分たちがやりたいことをする前につぶされてしまう。そう思ったなつみは、ネットのつながりであるマイナーレーベルに接触した。自分がHPでネットの女王(?)だった時代の知人である。

「まってましたよ」社長である彼はまだ30代と若い。

「これからは自分のやりたいことを、自分のペースでやっていい時代なんだ。そのためには、全面的に協力するよ」

彼はいつてくれた。地道にアーティストを発掘し、主な媒体はネットであるにもかかわらず、ファンには圧倒的な人気と購買力を持つレーベルに作り上げた。

「君のような人を待ってたんだよ。どうかみんなの指針になってほしい。」
マルチプレイヤーとしての実力とアレンジ力は、なつみ自身が送り続けた、デモ曲とライブで実証済みだ。

「私が気が変わらなければね」
茶目っ気たっぷりに、なつみはウインクしてみせた。
最終日、いよいよミキシングとコーラス録りである。ボーカロイドの使用を断ったなつみであるので、必然的にメインはなつみになる。

「私は高音部、二人は低音部ね」
今日は4声でコーラスを録る。そのうち2声は、なつみの役目だ。音が4つあるので、ぶつかり合わない、クリアなコーラスが要求される。各々がブースに入り、コーラス録りだ。音の動きが少ないけんじとゆうきとは対照的に、なつみのコーラスは複雑である。それでも曲が聞きつらいのは、なつみのアレンジのなせる技。

なつみの透き通った高音がブースに響き渡る。3オクターブ半まで出せるなつみの声帯はまさに驚異的である。人間の範疇をはるかに超えている。音域だけでなく、音量のバランスも見事である。隣り合う音で緊迫感をあらわし、そうかと思うと空間を感じさせるハーモニーで緊張をほぐす。まさに歌う姿は「ミューズ」の化身である。

最後のバースを歌い終わると、歌姫は何事もなかったかのように、ブースを出てきた。

「おつかれ」
「どうだった？」
けんじとゆうきの問いに
「まあまあかな？」
とって茶化した。

ドラム録りに問題があると、スタッフに指摘され、3人は再びスタジオに入った。ゆうきの番である。ちょっとしたリズムの録りなおしの後、ゆうきは突然提案した。

「ここにパーカッションをいれたいんだけど」
当初の打ち合わせと違う内容に、スタッフは困惑。
「時間もないし、このまま行こう」

というのを強引に押し、ゆうきはブースに入った。
「この曲にはどうしても必要なんだ！」
タペ録音が終わり、帰宅して自室に一人こもり、ベッドに横になって今日の録音した曲を反芻していた。

「なつみのバイオリンにパンチが足りない」

そう感じた彼は、やおらベッドから飛び起き、PCに向かった。データを呼び出し、曲をフィードバックさせる。なつみのバイオリン・パートを何度も何度も聴きなおい、それにあうパーカッションの音色を探り出していった。

「これだ！」彼が最後に選んだのは、マリンバの音色。これならなつみのバイオリンの音色とぶつからずに、パンチを加えられる！バイオリンのフレーズを邪魔しないよう、効果的になるよう慎重にプログラムしていった。作業が終わったのは、夜も白んだころだった。

「いきます！」自らキューを出し、ゆうきはスティックを振り上げる。

あらかじめ音色がセットされているMIDIパッドをゆうきは慎重にたたいてく。ヘッドホンからは、なつみの奏でるバイオリンが流れてくる。

バイオリンの旋律に沿うように、ゆうきの打ち出すパーカッションは鳴り響く。

ブースのコンソールの前では、エンジニア、プロデューサー、そしてなつみとけんじの二人が固唾を飲んで見守っている。いや、聞き込んでいる。まるでゆうきの奏でるマリンバの音色に酔うように。

最後の一音が終わっても、皆その場に凍りついたように動かない。

「おわりました・・・よ？」

完全燃焼したゆうきの、でも少し気の抜けたような一言で、一同はわれに返り、それと同時に、割れんばかりの喝采を送った。

「これはすばらしい曲になるぞ！いや、してみせる」

スタッフはお互いの肩を抱き合った。高揚した気分を隠さずに、祝福した。

発売してみれば、あっという間に重版。3人のCDは、今年最高のベストセラーになっていた。続くコンサートもすべてソールドアウトという状態であった。

ここS市のほぼ中央に位置するコンサート会場は、かなりメジャーなアーティストでも満席にするのは不可能といわれる。事実、一万人以上の収容率を誇る会場を、いくつもこなしているアーティスト連中も「ここは鬼門だ」といわれる会場である。

だが、なつみたち3人のバンドは違った。3人という最小単位で複雑な曲をこなし、おかつなつみ一人でベース、ギター、キーボード、そして時には曲によってバイオリンも弾きこなすマルチぶりは、ファンだけでなく多くの音楽ファンを魅了していた。

加えてなつみのルックスは、まさに美の化身「ミューズ」を彷彿とさせるにふさわしかった。巷に流れるどれも似たような曲、気の抜けた歌唱、ありふれた使いまわしの歌詞にあきあきしたりリスナーの耳に、彼らの曲は絶好のタイミングで飛び込んできた。一聴すると複雑な感じのする曲調だが、何度か聞き込むほどに耳になじんでゆく。そんなかれらの曲は、ひとえになつみのメロディセンスによるところが大きい。「誰でも聞ける、ネオ・クラシカルポップ(?)」それがなつみのコンセプト。加えて職人氣質なけんじとゆうきのプレイは曲にパンチを加える。

さて会場に目を向けると、まだ開場まで3時間以上もあるというのに、長蛇の列。中には彼らの曲を大合唱しているものもいる。ステージをのぞいてみよう。客席は5万人は収容可能という最

大級の会場である。あまたのイベントが赤字を出し続け、号を煮やした県がついに補助金をだしたという、いわくつきの会場であるが、そんなことがうそのように、外ではダフ屋までうろつく盛況ぶりである。

ステージは広すぎず、どの客席から見ても見渡せる程よい面積である。それでも一番後ろの席からはステージ上のメンバーが米粒くらいにしかみえないので、ステージの上には巨大なスクリーンが設置されている。

ステージの背景には、なにやら荘厳な建物。教会のようでもあるし、宮殿のようでもある。サグラダファミリアを彷彿とさせるような、しかし見たこともないような尖塔がステージのてっぺんまでそびえている。

ステージ中央にはドラムセットが備え付けてある。複雑な曲をやるため、タムは8個、フロアタムは3つ、スネアが3個、シンバルは10枚、そのほかにMIDIパッドは8枚ある。

左側はけんじの領域。出力500Wのアンプ8台を並べ、足元にはすっきりとすえつけてあるエフェクターボード。ギターは客席からみて、見えない部分も含めて20本以上ある。エレクトリック、アコースティックのほか、民族楽器も。エフェクターに並んでペダルキーボードもある。これはベースの代わりに弾く場合や、キーボードでは足りない音色を補ったり、シーケンサーのスタートスイッチの役目をする。

そして、ステージ右側はなつみの領分。装飾はまるでお姫様の部屋の様。客席からみると豪邸中のプライベートルームのようである。

さて機材だが、ベースアンプらしきものは見あたらない。エフェクターも含めてすべてラックに収められ、すっきりとした印象。音量、音色の調整は、あらかじめなつみの指示でコンサート・エンジニアが行う。使用ベースは1本。ボディの色は落ち着いた深い赤。コントロールは、トーンとボリュームのみのシンプルなもの。ただし、抜けのよい音がほしいとのなつみの希望で、アクティブ仕様になっている。

キーボードは2台。76鍵と88鍵が1台ずつ。音源はこれもラックに収まっている。キーボードの足元には、ペダルキーボード。なつみがキーボードのみを演奏するとき、ベースの役目をしたりする。けんじのものと一緒に。そしてキーボードの脇にはバイオリン。広大な会場でやるには、通常のアコースティック・バイオリンはコントロールしづらいという理由から、エレクトリック・バイオリンを使用する。色は明るいオレンジだ。

やがて、開演の時間になり、会場内のライトが落ちる。客席は満杯で、空調はもはやコントロール不可能なほど、客はヒートアップしている。

ライトが落ちると、彼らのテーマ曲でもある「2001年宇宙の旅」で有名な、あの曲が流れる。観客は熱狂し、音もかき消されんばかり。クライマックスが始まると同時に、ドラムの音が曲と同調する。間断なくギターのリフが始まり、やがてベースが加わる。それはドラムのフレーズと寸ぶんたがわぬ間合いで、曲の緊張感を一気に高める。怒涛のようにギター、ベース、ドラムのフレーズがなだれ込む。早いシーケンス・フレーズの後、いったんスピードを落とし、ブレイクしたかと思うと再び、3つの音が重なった。

歌へと突入する。

目が覚めれば現実。まどろみの中で親しげな声が響く

誘いの言葉は一日の祝福。それはうつろな朝の月

私の叫びはコンクリートの壁にはじかれる
確かな空虚・・・コンサート・ホール！

中間部では、シーケンス・フレーズ。ギターとシーケンサーの完全なる同期だ。それに対してベースは、のんびりと、まるで気の抜けたようなトニックを鳴らす。

ギターソロは本体に取り付けたアームによるギミックで、より効果的に魅せる。けんじの真骨頂だ。エンディングはそのままのスピードで一気に畳み込んだ。

割れんばかりの喝采で開場の天井も共鳴している。今にも落ちんばかりである。コンサートも半ばで、なつみはベースからバイオリンに持ち替える。

「この曲は新しいアルバムからです」なつみのコメントの後、鈴のような音色で始まったシーケンスフレーズにけんじのギター、ゆうきのパーカッションが重なる。胸の奥に伝わる、懐かしいような、切ないような旋律。最初の16小節を歌い終わると、なつみのバイオリンが鳴り出した。すべての弦を使って低音から高音まで、思いのたけをつむぎだす。それにあわせて、ゆうきのパーカッションが寄り添うように支えるように鼓動する。

エンディングはバイオリンソロでしめくくる。一気に駆け上るフレーズは炎の中を飛翔する鳳凰をおもわせた。

開場をゆるがす、けんじの踏むペダルベースの重低音とともに、音の余韻がしばしの沈黙を引き起こす。しばらく後、割れんばかりの拍手と喝采。思わずなつみは微笑む。

「ありがとう！」

やがてエンディング。

「この曲はベースとキーボード交互に弾きます！」

ほかの曲でも随所にキーボードを引いていたなつみだが、この曲は特に難易度が高い。

ベースで引くフレーズを、そのままペダルで弾く部分があるからだ。ラフなギターのカットティングのあと、ドラムとベースの連打で曲に突入していく。そのままのスピードでしばらく奏した後、息もつかせぬキーボードのフレーズ。細かいフレーズで手と足同時に演奏するテクニクだ。見ている客ももはや完全に曲に感情移入している。中にはリズムにあわせてエアードラムをしている客もいる。

再び虹色ギターの登場だ。アームとエフェクターを駆使し、その音色はもはやギターを超越して何かの管楽器の様。高音を響かせ、空間を感じさせるフレーズはアドレナリン全開である。やがてギターソロが終わると、最初のフレーズに戻り、そのまま怒涛の勢いでコードを抜いたように終わった。

「ありがとうみんな！またあおうね！」

いつまでも歓声は終わらない。やがてアンコールの音が響き渡り、再び3人をステージに引きずり出す。

「サンキュー！」

ゆうきが1人ステージに登場する。客席は一瞬沈黙に包まれる。

「最後にとっておきの曲を紹介します。今まで暖めていた曲、なつみ、よろしく！」

そしてなつみが登場。アコースティックギターを抱え、自分の部屋へと移動する。

「これはとってもプライベートで・・・ちょっとはずかしいんだけど。今日のために歌います！」

けんじがギターを抱え、明るいシーケンスフレーズとともに、なつみのギターが歌いだす。どこか中東風のフレーズ。よどみなく、はつらつと。

歌は佳境に入り、なつみはステージの最前列までゆっくりと、歩いた。ギターを抱えたまま、手を振る。客席に向かって手を振る！振る！ちぎれんばかりに。そしてその顔は、太陽のようにほころんでいた。誰が見ても、幸せな気持ちになる。その目には、涙すら浮かんでいた。ソロをけんじに任せて、ステージのすみからすみまで歩いたなつみは、やがて自分の部屋に戻り、最後のフレーズをさえずる

この歌が世界に届きますように・・・

歌を惜しむかのようななつみのギターのフレーズで、ステージは幕を下ろした
拍手はいつまでもなりやまない

何をやってもだめだった。学校の成績もびりから数えたほうが早かったし、何にもまして、学校に行くのがいやだった。何事にも集中できない性格で、部活動にも入らなかった。趣味はギターを弾くこと。帰宅すると、着替えもそこそこに自分の部屋でギターをはじめた。両親は仕事が忙しくて、ほとんど家にいない。帰ってくるのはいつもPM8：00過ぎだった。生活もあまり思わしくなかった。

毎日ぎりぎりの生活水準で、それでも両親は子供に不自由をさせたくなかった。小遣いを渡し、学校も卒業してほしいと願っていた。でもけんじは、高校を中退した。唯一自分が熱中できたことはギターだったので、音楽の専門学校に行った。相変わらず他人とはなじめなかったが、少しずつ上達するギターの腕に、なんとなく自分なりに将来を考えるようになった。

20才になって仕事もはいつてくるようになったけんじは、あるマイナーレーベルから誘いをうける。

「才能ある人と一緒にやってみないか？」

特に考えてはいなかった。メジャーだろうがマイナーだろうが、仕事ができれば何でもよかった。イヤ、ギターが弾ける場所があればどこでもよかったのだ。けんじの唯一のよりどころ、ギターを弾いていれば、すべて忘れられた。回りの雑音も聞こえなかったし、いやなことも考えなくてよかった。

初めてなつみを紹介されたとき

「なんだ、女かよ・・・」

と思った。正直がっかりだった。けんじの中の女性観は、かわいいだけで、創造力も決断力もない、男にちやほやされるだけの存在だった。

でもなつみは違っていた。最初からコンセプトがはっきりしており、けんじのする仕事もきっちり決められていた。

「自由にやってほしい。あなたのもてる表現力を最大限に出してほしい」

なつみはいった。

その後は何度も何度もリハーサルの繰り返し。

「どうして、何がいけない？何がたりない？」

けんじは自問自答した。

「ちがう！私がほしいのはそういうのじゃない！」

思い通りの結果が得られないと、なつみはブースをでていった。

「やっぱり女はヒステリックだな」

けんじはポツリと言った。

ギターを抱えながら、譜面を前にしてしばらくぼうっとしていた。

「あいつはあれでも、お前を認めてるよ」

「でも、いっつもああじゃないか。俺は馬鹿にされてるのか？女にあんな態度されて、いい気持ちでプレーできるはずないだろ！」

「そうじゃないんだ！あいつはお前にもっともっと表現しろっていったんだよ！自分を全部だせよ！くやしかったらお前にしかないものを、だしてみろよ！」

「ゆうきはなつみの味方かよ！2人して馬鹿にしやがって！」

「これだけいっても、わかんねええのかよ！」ゆうきは、スティックを床に投げつけた。

「なっ！」

けんじはブースをとびだした。

昔からそうだった。何事にも無気力で、周りに指摘されると腹を立てた。

（だから何事もうまくいかないんだ）

コンプレックスだと思った。こんな自分は何をやってもだめなんだ。

でも、唯一自分が誇れるもの、ギターだけが自信を持って続けられる。専門学校時代、講師にほめられたことがあった。

「きみは個性がある。いいものをもってるよ。それはきみの武器になる。」

そのときは漠然と聞いていた。そういうものなのかと思っていた。今まで仕事ははいてきたのも、ただ漠然と受けていた。自分で仕事を積極的に探しはしなかった。そうしなくても、仕事が

はいつてきたからだ。でも、これからは自分をもっと出していかなくてはならない。今までは他人とぶつかるのがいやで、ただこなしていただけなんだ。自分をもっと表現するんだ！そう思ったけんじは、ブースに向かった。

「けんじは？」

「出かけた」

なつみは紅茶をのみながら、ブースの中にポツンと置かれたギターを見ていった。

「少しは気づいてくれたかな？」

「どうかな。結構頑固そうだからな」

「そういうところも必要なんだけどね」

「ま、きづいてくれることを願ってるよ」

そのとき、ドアが開いた。

「お待たせ！続きやろう」

なつみとゆうきは少し微笑んで、顔を見合わせた。

なつみのプライベートはほとんどゆうきと一緒にいる。ゆうきの方はもうほとんど夫婦だと思っている。でも、なつみは違う。

「いい人間関係ってというのは、ある程度の距離を保つのがいいの」

どうせ一時のぬくもりを求めても、壊れるのは目に見えている。だったら本気になるだけ損だと思う。

人間関係はわずらわしい。できればかかわりあいたくない。かかわりあいたくないのに、そうせざるを得ないのは、貨幣経済のなせる技か？にわか経済学者のようなことをちょっと考えてみたところで、なつみは苦笑した。

「私は冷静だな」

感情的にならないのが、自分の性格上の利点だと思っている。いつか、ゆうきにいわれたことがある。

「お前はいまいちリアクションが薄いよ！いいのか悪いのか、はっきりしないし、こっちが手を差し伸べてやりたくても、どうしていいか、わからない」

いや、別に助けてほしいわけじゃない。ただ最後に結論めいたことを出すときの後押しをしてほしいだけだ。

はっきりいって話すのは苦手だ、誰と会話するときでも、はなしの起承転結をかんがえてしまいうし、あらかじめ言葉を用意しないとだめ。世間話なんて、もつてのほか。だいたい、時間と労力の無駄だと思う。

「それじゃ、世間でうまくやっけてけないだろ」

いいよ別に。うまくやっけていこうなんて思っちゃいない。自分のやりたいようにやるだけ。それでだめなら、野タレ死ぬだけだから・・・。

ゆうきはそんななつみを見放せずにいる。もういい大人なんだから、お互いの生活があっけしがるべきだと思う。確かに幼馴染で（親を除いては）、一番長く身近にいる存在だからというものあるけど。

なんというか、ほっとけない。見た目も含めて、つい手を差し伸べてやりたくなるオーラを出してる。告白してからかなりの時間がたつが、いまだに2人の間は進展してないと思う。それ以上何を期待するわけでもないが・・・。そういうそぶりくらいはみせてくれてもいいと思う。

「ま、いいけどね」

新譜の好評な売れ行きに伴って、グループは日本中を駆け巡る。どこも開場は満員御礼で、もはやそういう状況が当たり前になりつつあった。

「マンネリはよくないよ」全国ツアーも一段落したある日、なつみは言った。

「どのグループもかかえる問題だけどね」

ゆうきは

「でも、まだまだ続けられるよ」

という。

「うん、もちろんだけど、今の状況には落ち着いていてもしかたないからね」

「まさか、また突然やめるんじゃないだろうな」

「突然はないよ。突然は、ない。でも、私の中の、“新しいこと大好き虫”が騒ぎ始めてさ」「なんだそれ、そのなんとか虫って」

「今考えた」

「俺だってまだまだいけるぜ」

けんじもゆうきに同意する。

「ん、だからね」

なつみはひとつのジャンルにこだわるのはいやだという。多彩ななつみのことなので、こだわりなくいろんなジャンルに挑戦したいのだろう。

「お前はいつだってそうだからな。ま、心配はしてないよ」と、ゆうき

「心底信頼してるんだななつみを」ゆうじはほんの少しの嫉妬を交えていう。

「・・・っていう心つもりだけはしといてよ」

なつみはそういうと席を立ち、

「ちょっと買い物にいつてくる」

いつものことだと言いたげな顔のゆうきと、何事か考えているようなけんじの顔が部屋にとりのこされた。

自宅から程近いコンビニにまで、なんとなく早足で歩いた、ふとガラスに移った自分の顔を見て、なつみは思った

(移り気なのかな?)

自分には自信をもっている。曲は次から次へと沸いてくる。それを表にださないと、くさってしまう。その腐ったものが、つもり積もって、自分の頭の中で消えずにいつまでも残っている。

記憶ってそういうものだと思う。ちいさいころからの記憶。日々のいやな思い出。発散するすべを知らないころは、ずっとわだかまっていた。それが、頭の中で発酵していずれ気体となって、いつまでもただよっている。

しめきった部屋の窓を開放するように、そのわだかまった空気をおしだしてくれたのは、ネットの世界だった。自分が知らない場所で、自分の知らない人が、こんなにも多くの人が自分に問いかけてくる。自分を認めてくれる。中には中傷めいた言葉もあったが、ほとんどは好意的だった。

それと同時になつみは思った。

（私が大切におもうことってなんだろう？たいせつなひと・・・）

ふと、ゆうきのことを思った。

（誰かを思う気持ちって、とってもやさしいものなんだな。あ、でもこれは恋愛感情じゃない。なんていうか、なくしたくないもの？いつまでもそっと心の中に持ち続けるもの・・・）

なつみは買い物も忘れ、急いで自宅へ帰った。

ドアを開けて、開口一番

「あのさ、それでおもいついたんだけど！」

3人は相変わらず行動をともにしている。ただ、いままでより少し自由な活動をしている。マイナーレーベルの社長と打ち合わせて、ネット配信に重点を置いて、ライブは年3回。CDの製作は気が向いたら。個々のソロ活動は束縛しない・・・

3人が一緒になるのは、レコーディングの時のみという限られた時間になった。終われば各々自分の生活に戻る、それが3人の結束を緩めることにはならないし、お互い尊敬し合えば、目的に向かって進むことができる。

それでもゆうきは、なつみといっしょにいたいと思う。それが自分にとって一番安心できるし、心地よい。

ある日、いつものように同じ部屋で2人一緒に作曲に没頭している。

「そろそろごはんつくる」

外食がほとんどだが、たまになつみが作るときもある。なつみがキッチンに立ったのを見計らって、ゆうきもキッチンにむかう。

「今日はなに？」

「しょうが焼き。すきでしょ？」

なつみはゆうきの好物は知っている。なぜか家事一般もこなすなつみは、料理も得意で、家庭料理だったら、全般的にこなす。それでも特にゆうきの好物は優先する。

（簡単だしね）

クスッと笑ったなつみは、少しだけゆうきを意識した。

「そういう姿は奥さんみたいだな」

ゆうきはなつみの後ろにたつ。なつみは、なにもいわない。

ゆうきは目の前にいるなつみの後姿を見つめながら

「俺やっぱりなつみのことが・・・」

「私、おもうんだけどね」

ゆうきのせりふをわざとさえぎるように、なつみがいった。

「誰かを思う気持ちって大事だよね。私、今までみんな1人でやってきたから、あんまりそんなこと考えなかった。でもさ、そういう気持ちってとってもやさしくって、とってもほんわかしてて・・・なんていうか。リラックスするよね！」

「リラックスか」

ゆうきは苦笑し、

「なつみらしいな、俺はお前のそういうところが」

ゆうきはなつみの首にゆっくりと腕を回し、さらさらの髪に顔を押し付けた。

(なんだかなつかしい香りだ・・・)

「俺はお前のそういうところが・・・いやお前が」

「あ、そうだ！」

突然、なつみは大声を上げた。

「新しい曲思いついたから食べたらうちあわせしよう！」

お前はいつもそうやって・・・ま、いっか。

ゆうきはそれでもなつみを抱きしめた腕を放さず、なつみもしばらくゆうきのしたいようにさせていた。

しょうが焼きの香ばしい香りが、キッチンを満たしていた。